

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大により、世間の様相は一変した。多くの学校が長期休校となり、飲食店街から人の姿が消えた。五輪開催は見通せなくなり、夏でもマスクが必須となった。私が勤める新聞社の紙面も連日、コロナ絡みの記事で埋められている。

社会の空気が変わる感覚は一〇年ほど前にも抱いた。

二〇一一年三月一日、東日本大震災が発生した。東京電力福島第一原発事故が起き、一〇万人を遥かに超える人たちが避難を強いられた。慣れ親しんだ故郷を突然追われ、全国各地に逃れていった。沈痛な空気が広まった。

当時、私が勤務していた石川県には北陸電力志賀原発しかがあった。福島第一原発と同様の事故が起きた時、県内に住む人たちが無事に避難できるのかと考え、県の地域防災計画の検証を進めた。原発取材とは縁がなかった私も、原発事故を我が事として受け止めるようになっていた。

東京新聞の特別報道部へ異動してまもない一三年秋、私は福島原発事故で被災した人たちの

取材を始めた。福島県内の仮設住宅を巡り、避難生活を強いられた方々の胸中をうかがった。

その一方で特に問題意識を持っていたことがあった。甲状腺内部被ばくの状況だった。

放射線にさらされる「被ばく」は、体の外から放射線を受ける「外部被ばく」、体の中に放射性物質を取り込み、体の内側が放射線にさらされる「内部被ばく」に大別できる。

甲状腺内部被ばくは放射性ヨウ素という放射性物質によってもたらされる。空气中を漂っている時に呼吸すると体内に取り込んでしまうほか、水などに混ざった分を口にするると体内に入る。放射性ヨウ素はのどにある甲状腺に集まる性質があり、放射線を発して被ばくさせる。これによって後々、ホルモン分泌をつかさどる甲状腺のがんに見舞われることがある。

原発事故の被害のうち、核心に当たるのが甲状腺内部被ばくと考えていた。

被ばくは、原発事故特有の被害と言える。その中でも甲状腺内部被ばくは、特に目を向ける必要があった。原因となる放射性ヨウ素は気化しやすいため、事故が起これば放出される可能性が高かった。一九八六年に旧ソ連で起きたチェルノブイリ原発事故でも放射性ヨウ素が大量に放出され、被災した子どもたちの間で甲状腺内部被ばくによる甲状腺がんが多発したとされる。あの事故で周辺住民に生じた唯一の放射線被害が甲状腺がん、と解説した研究者もいる。

つまり「事故の際に見舞われやすい」「深刻な被害をもたらした実例がある」と言えるのが

甲状腺内部被ばくだった。だからこそ、その状況をつかむ必要があると考えて取材を始めた。

ほどなくして、政府が甲状腺内部被ばくを調べる測定を行っていたことを知った。事故から二週間ほどたった二〇一一年三月二四日から三〇日にかけて実施していた。のどに測定器を当て、甲状腺から出る放射線の状況を調べることで、甲状腺に集まる放射性ヨウ素の量、その放射性ヨウ素がもたらす内部被ばくの程度をつかむという試みだった。

しかし、政府の測定で調べたのは一〇八〇人だけだった。福島県民だけでもおよそ二〇〇万人、一八歳以下でも四〇万人近くいたにもかかわらずだ。

放射性ヨウ素は、量が半分になる「半減期」が八日と短い。しばらくすると消えてしまう。早く測らないと、被ばくの状況が分からなくなる。「望まない被ばくをした」「被ばくのせいではなくなった」と訴えたい人がいても、測定を受けて「被ばくした」という記録を残しておかないと、被害を訴えるのが難しくなる。そう考えると、行政側は事故からまもない時期により多くの人を測っておくべきだったのに、政府は一〇八〇人を調べて終えてしまった。

後のコロナ禍でも、一人一人の感染の状況を調べる「PCR検査」の実施件数が少ないと問題視された。これに先駆けた福島原発事故でも似た状況が生じていたと言える。

なぜわずかしか調べなかったのか。

その疑問の解明こそ必要と考え、情報収集に没頭していった。

取材を続けている間、甲状腺がんが見つかった人は相当な数に上った。福島県が事故後に取り組む県民健康調査では、事故発生時一八歳以下の県民四〇万人近くを対象に甲状腺がんの有無を調べる検査を実施しており、「がんやその疑い」と公表された人数は一八年に二〇〇人を超えた。専門家による検討委員会は一六年三月の段階で、過去の全国的な水準から推定される人数よりも数十倍のオーダーで多く見つかっていると分析した。

ところが政府も県も「甲状腺がんの異常発見」が甲状腺内部被ばくでもたらされたと認めていない。根拠としてよく引用するのが、政府の甲状腺被ばく測定だ。一〇八〇人の測定結果を基に「被ばくの程度はそれほどでもない」「今見つかるがんと被ばくの関連は考えにくい」と周知した。がんが多く見つかるのは「自覚症状のない人も幅広く検査したため」などと説明してきた。

当然ながら、被ばくの被害はない方がいい。しかし、疑問が募るばかりだった。

測定数が少ないことをなぜ問題視しないのか。そもそもなぜわざわざ測らなかつたのか。

これらはいわゆる「政府事故調」「国会事故調」でも先行報道でも明らかにされなかつた。当時の文書が廃棄され、関係者の特定も難しかったのかもしれないと受け止めていた。

時がたつにつれ、福島原発事故の報道は大きく減った。しかし私は取材を続けた。やめなかつた理由は明確だった。被ばくの状況をよく調べず、「被ばくの影響は考えにくい」と片付けようとする行政側の姿勢は全く理解できず、被災した人たちも納得いかないだろうと思つてきたからだ。強弁の裏にある理屈や疑惑をたださなければ、これからも同じ事態が起こり得ると考えてきたからだ。

取材の末に明らかになったのは「歪曲」わいぎよくや「工作」だった。

一連の取材成果は一九年一月から三月にかけて、東京新聞特報面の連載「背信の果て」で報じた。数多くの内部文書と関係者の証言を改めて整理し、より詳細に伝えるのが本書の目的だ。第一章では、政府の甲状腺被ばく測定の重大な欠陥を浮き彫りにする「一一歳の少女」の話を取り上げる。第二章以降では、一〇八〇人を調べるだけで測定を終えた内幕を明らかにする。